

# 克己心

～自分に負けない心～

夢を語り、夢を追う生徒  
笑顔 続ける 支え合う

【学校だより】  
平戸市立平戸中学校  
令和8年6月22日  
文責 原田 誠 第11号

## それぞれの舞台上で輝く生徒たち



6月20日(土)に市中総体陸上競技大会、21日(日)には第21回平戸市「少年の主張」大会が、それぞれ開催されました。

陸上競技大会では、雨や強風に見舞われる厳しいコンディションの中、決して万全とは言えない競技環境でしたが、選手たちは最後まで力強く競技に臨み、素晴らしい走りや跳躍を見せてくれました。県中総体に向けて、これからも自らの可能性に挑み続け、さらに活躍してくれることを期待しています。また、顧問の前田先生、引率、そして大会役員として運営に携わってくださった先生方も、悪天候の中ご尽力くださいました。大会は多くの方々の支えによって成り立っています。選手の皆さんには、そのことへの感謝の気持ちを忘れずにいてほしいと思います。

一方、少年の主張大会では、3年生の末吉詩織さんが見事、優秀賞を受賞しました。多くの聴衆を前に、自らの思いを堂々と、そして力強く発表する姿に、私も大変感銘を受けました。講評では、審査員長から「発表がとても上手だった」「難しいテーマに挑戦していたが、これからも考え続けてほしい」とのお言葉をいただき、その内容と発表態度が高く評価されていました。この受賞も、ご指導いただいた黒崎先生をはじめ、支えてくださったご家族、応援にかけつけてくださった保護者の皆様、仲間や先生方の支えがあってこそそのものです。心より感謝申し上げます。

受賞した発表を、ぜひ皆さんにも読んでいただきたいと思いますので、掲載いたします。

### 「和して同ぜず」 平戸市立平戸中学校三年 末吉詩織

「普通。」この言葉を聞いて、皆さんはどのような印象を受けるでしょうか。

「普通はそんなことしないよね。」「それは普通じゃないんじゃない。」

私は、今までこの「普通」という言葉を強く意識して生きてきました。

「自分だけ浮いた存在にはなりたくない。」「普通でないことで、周りから嫌われたくない。」「普通でないことで、自分の評価が下がってしまうのではないか。」

常にそのような不安を抱えながら、私は過ごしてきたような気がします。

他人の目を気にしすぎるあまり、自分が本当にしたいこと、やらなければいけなかったことを見過ごしてきたのではないか。「普通」という言葉におびえながら生きてきたのではないかと。

「普通でいよう」「普通でありたい」と思うあまり、「普通」という言葉に縛られていた、そんなある日、父のある言葉にハッとさせられました。

「自分が好きだと思っている服を、相手が良くないと言ったとしたら、その服はもう嫌いになるのか。」

自分が安心したいから「普通」を選んでいただけ。相手が考える「普通」に自分が左右されていたこと。周囲に合わせることによって、本当の自分を捨て去っていたのではないか。実は「普通」でいる自分を否定したくてたまらなかったのではないか。

気が付くと、いつのまにか涙があふれ出ている自分がいました。それは、自分の気持ちを抑えることに疲れ切っている自分でした。

「私が自分自身であるためには、幸せになるためには絶対にこのままではいけない。」

「論語」の中には「和して同ぜず、同じて和せず」という言葉があります。

それは、「周りとは協調はしても、主体性を失ってはいけない。仲良くしても、周りに流されたりはしない。周囲に流されている人は、一見仲良くしているようだが、主体性を失っている。」という孔子の言葉です。

私も、友人という集団の中で、「そうかなあ」「違うんだけどなあ」「本当は別のことをしたいんだけどなあ」と考える場面が多々あります。そんな時、やっぱり周りの反応を気にして、周囲に流されている自分がいることに気づかされます。それは孔子の言葉にあるように、周囲に流されて主体性を失っていると同時に、自分の貴重な時間を失ってしまっていたのだと思います。

本当の意味での「和す」というのは、お互いが主体性を失わず、集団として協調していくことではないでしょうか。主体性と協調性を両立させることは難しいことかもしれません。しかし、みんなが「普通」と思うことに疑問を感じながら同調したり、最も多い意見を正しいと決めつけたりする必要はないはずです。

集団の中で自分を見失わない。これは、これからの私の大きなテーマです。協調性を保ちながら、主体性を持ち続ける。この二つを両立させていくことは、とても難しいことだと思います。しかも、このことは、私だけではなく、孔子の生きた二千年以上前から続いている、人として、集団の在り方としての永遠のテーマではないでしょうか。

私という自分自身を大切にしたい。私という存在は世界にたった一人しかいない。しかし、自分一人ではこの世の中を生きていくことはできません。仲間の意見に耳を傾け、共感し、優れた意見には視野を広げながらも、自分の主体性を保ち続ける。そのような生き方をしてみたい。それが実践できるならば、

「私」という人間は、「人」として大きく成長できる。そのように感じているのです。

周囲の、「普通ではない」という言葉におびえていた私。周囲と違うことに心を震わされていた私。そんな「私」が「私」であるために、「和して同ぜず」この言葉を胸に刻み、自分自身の人生を、しっかりと歩いていきたい、私は今、そう思っています。